創世記の記録

第２部 創造主が造られた世界

Ⅶ／ノアの時代

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神　正海

ー 1976 年版ー

第2部　創造主の造られた世界

Ⅶ　ノアの時代（創世記六章）

神の子たち

人類の歴史の最初の時代は、ノアの時代にまさにその頂点に達しました。罪の病は、エバが神の言葉を疑うように誘惑された時、全く無害であるかのように始まりました。しかし、それは、カインの生涯を通し罪の真の醜さを現し始めました。また、それはカインの子孫たちが発展させた神を敬わない文明の中で成熟し、ついにはひどい邪悪と退廃の泥沼に陥りました。天の水門からの水に全体がつからなければ、その熱病に冒された地球を洗い清めることはできなかったほどでした。そのように恐ろしく悲劇的な時代の特徴は、今日の啓蒙された文明にとって奇妙に思われるかも知れませんが、今の終わりの時にも繰り返されることになっているのです。過去の歴史を理解する立場からも、また、未来の導きを求める立場からも、差し迫って重要なことは、ノアの時代に起こった出来事を正しく理解することです。

キリストが十字架にかけられる二日前に、弟子たちがキリストに「あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょう」（マタ二四・三）と尋ねました。キリストは色々な「前兆」を示され、それがその時代（すなわち、前兆を見る時代）に同時に起こるのであり、それが彼らの要求した前兆だと答えられました。これらの前兆は、「人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱船にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、その通りです」（マタ二四・三七～三九）との預言的警告で頂点に達します。こうして、イエスは大洪水の歴史的真実性を保証されただけではなく、洪水前の日々の特徴を綿密に学ぶようにと人々に勧めておられるのです。なぜなら、洪水前の状態は、キリストの再臨の直前の時代の背景でもあるからです。

第六章一～二節　さて、人が地上にふえ始め、彼らに娘たちが生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした。

洪水前の世界の道徳的、霊的な状態は、年の経過につれて悪化するばかりで、その状態はカインの子孫だけでなく、結局、セツの子孫の中にも同じように広がりました。約束の子孫（キリスト）の家系につながるわずかに残された人と、エノクのような人のあかしで影響を受けた少数の人を除いて、人々の間に物質主義と不信仰が蔓延しました。

そして、ノアの時代に実にひどいことが起こりました。このような邪悪と暴虐の大波が、地上に瞬く間に

広がり、もはや救済の道はなく、ただ完全な滅亡しかない状態になってしまったのです。「神の子ら」が「人の娘たち」を見て、自分たちの妻としたのです。そのために、このような結合で生まれた子どもは、「地の巨人」であり、名のある勇士であり、ずうたいばかりでなく、邪悪さもずば抜けた怪物だったのです（創六・一、二、四）。

この節に対する人の最初の反応と高等批評家の標準的解釈は、古代のおとぎ話、人食い鬼や竜の伝説、および、人々と交わっている神々の神話を思い浮かばせます。そして、話の全体を伝説や迷信として片づけてしまいます。

一方、現代のクリスチャンは、「神の子ら」とはセツの子孫であり、「人の娘たち」とはカインの子孫で、彼らの結婚は信者と未信者を分離している壁を取り壊すことを示していると説明し、その話をもっと耳ざわりのよいものにしようとしばしば試みました。もう一つの、超自然的な意味を避け得る他の解釈は、「神の子ら」は王や貴族とするもので、その場合、王族が庶民をめとったために、ただそれだけで混じり合ったと記されているのです。

しかしながら、これらの自然主義的解釈は、共にこのような結合で生まれた子どもがなぜ「巨人」になったか、また、彼らが全世界に滅亡と暴虐を引き起こしたかを説明していません。聖書は、信者が未信者と結婚すべきでないことを教えています。（Ⅱコリ六・一四、Ⅰコリ七・三九）が、この特殊な罪は赦しがたいものであり、一般的に他の罪よりさらに多くの道徳的退廃を引き起こすとは示唆されていないのです。知的に難点はありますが、これらの節で述べられていることは、明らかに通常の出来事を超えた重大な出来事でした。

この一節の解釈は、明らかに、「神の子ら」（bene elohim ベネ・エローヒム）という語句の意味のとり方

にかかっています。もちろん、新約聖書では、この用語は個人的にキリストを信じて新生した人たちのすべてに関して用いられています（ヨハ一・一二、ロマ八・一四等）。そして、父に対する子どもの関係と似たところがあるものとして、神に対する信者の霊的関係は、旧約聖書にも見いだされる考えです（詩七三・一五、ホセ一・一〇、申三二・五、出四・二三、イザ四三・六）。しかしながら、これらの例のうち、六章二節、四節と同じ用語を用いているものはなく、さらに、各々の場合、その意味も、この創世記での意味とは実際には一致しないのです。創世記でこれまでに、たとえ霊的な意味ででも、セツの子孫にも、真の信仰者の誰に対しても、神の子たちと言っている箇所はありません。また、肉体的にも、アダム自身を除けば、彼らは神の子ではあり得ませんでした。少なくとも、本文にはなんの説明もないので、このような意味がこじつけられたのでしょう。このような説明を要しないただ一つの明白で自然な意味は、これらの存在は人というよりは、神の子たちであった。なぜなら、彼らは、生まれたのではなく創造されたからです。もちろん、このような記述は、神が直接創造されたアダム（ルカ三・三八）と天使だけに当てはまるはずです（詩一四八・二五、詩一〇四・四、コロ一・一六）。

ベネ・エローヒームという用語そのものは、他に三回用いられており、すべて、大変古い書であるヨブ記（一・六、三八・七）で用いられています。これらの箇所では、もっぱら、天使について用いられていることは全く疑う余地はありません。非常によく似た文体 bar elohim（バール・エローヒーム）が、ダニエル書三章二五節で用いられており、ここでもまた、天使か神の顕現かのどちらかを述べています。「力ある神の子ら」bene elhim（ベネ・エリーム）という用語は、詩篇二九編一節、八十九篇六節で用いられていて、これもまた、御使いのことを述べています。こういうわけで、ことば自体に関する限り、著者の意図していたことは、天

使、それも神の意思に反して行動しているので、疑いもなく堕落した天使についての考えを伝えたかったに違いありません。これはさらに、七十人訳のギリシア語聖書の翻訳者たち、ヨセフス、古代の外典エノク書の著者や他のすべてのユダヤ人の注解者、初期のクリスチャンの著者が、この節に与えた意味でもありました。初期のクリスチャンの著者で、神の子らはセツの子孫であるとの解釈を初めて提出したのは、クリソストムとアウグスチヌスのようです。

神の子らが天使だとの考えを拒まない人にとっても、その明らかな意味や、さらに、超自然的な示唆に疑問を抱く理由は、天使が人間の女性と性的な関係を持ち、子どもをもうけることは不可能なはずだという見解によるものです。しかしながら、この反対意見では、私たちが知っている限度内での天使の能力を前提としていますが、実際にはそれ以上であるかも知れないのです。天使が人の目に見える状態で現れた時はいつでも、聖書に記されている通りに、肉体を持った男の姿で現れています。例えば、アブラハムに会った天使たちは、実際にアブラハムと食事を共にしました（創一八・八）。また、後にソドムの住人の前に、完全な男の姿で現れたので、ソドムの人たちはこの人々を、同性愛の目的のために連れていこうとしました。ヘブル人への手紙の著者は、いろいろな時にある人々は「御使いたちを、それとは知らずにもてなしました」（ヘブ一三・二）と示唆しています。

主イエスが、「復活の時には、人はめとることも、とつぐこともなく、天の御使いたちのようです」（ヘブ一三・二）と言われたことは事実です。しかし、これは、天使には「性別がない」ということではありません。なぜなら復活にあずかる人は、男性か女性か、その個人的特徴を確かにとどめていると思われるからです。さらに、天使は、現れる時にはいつも「男性」として述べられ、代名詞は常に「彼」が用いられています。

どのようにしてか、彼らは機会がめぐってきた時、自分を物質化して男性の形態を取る能力を、神から与えられていました。しかし、そのときでさえも、彼らの身体は、私たちの身体を現在制約している重力や電磁力の支配を受けないのです。

主イエスが、神の御使いたちは天では結婚しないと言われたのは、天から追い出された御使いが必ずしも結婚出来ないことを意味しません。天使が人の娘と交わることは、決して神のご意志や目的ではありませんでしたが、これら邪悪な天使たちが、神のみこころに従うとは思いもよらないことです。事実、神のみこころを妨げようと計画したからこそ、「神の子ら」の大軍が不法にも人の娘たちの身体へ侵入したのです。

サタンは、約束された女のすえが、いつか彼を打ち砕くという神の預言を忘れてはいませんでした。サタンは、カインの子孫のうちに、彼自身の霊的種を植え付けましたが、神は真の子孫の系列をセツに保っていました。ノアが生まれ、のろいに対する「慰め」はノアを通して来る（創五・二九）と預言するようにレメクが導かれた時、サタンとその使いたちは、彼らがこの宇宙での闘争で勝利を得る機会が、今にも絶たれようとしていることを恐れたに違いありません。来るべき天の軍勢との戦いで戦力を補強したいと願い、また、もしできるならば、約束のすえがサタンを打ち破る前に、人類を完全に堕落させようとして、サタンは、神が人類に与えたすばらしい生殖能力を用い、人類を自滅させようと決心したように思われます。人の姿をとった天使たちは、今や、急速に地上に増え広がり、彼ら自身の種を人間に植え込むことによって、彼らは、わずか一世代のうちに、神に反対して連合するような大衆の支持を得ることが出来たかも知れません。そこで、これらの「神の子ら」は、人の娘たちを見て、「好きな者を選んで妻（文字通りには「女たち」）とした」のです。

注解者の中には、「妻とした」という語句は、旧約聖書の中で普通に、用いられている「妻にする」という

語句と同じで、通常の結婚以外のことは何も指さないと言っている人もいます。それゆえ、彼らは、これら「神の子ら」は単にセツの子孫の男性の信者で、カイン（または他）の子孫で神を本当に信じているか否かにかかわらず、見た目の美しい女性と結婚した人たちだと主張します。しかし、この論拠は弱く、いずれにしても他の重要な証拠をくつがえすほど十分なものではありません。「妻」（ヘブル語 ishah イシャー）という単語は、結婚した女性であるか否かを問わず、通常、女性をさして用いられています。「取る」（訳注・創六・二では「……とする」＝ヘブル語 laqach ラカッハ）は、ごく一般的な動詞で、目的語としてどんな名刺でも取ることができます。例えば、結婚していなかったのにシュケムはディナを「取り」（訳注・新改訳では「捕え」）、これと寝てはずかしめたのです（創三四・二）。

これら神の子らと言われている存在が、自分の好む女性を選んで妻とすることができたという事実は、さらに、だれかれの別なく性行為を行うことが、実にありふれた状態であったこと、すなわち、不品行が一般の状態であったことを示唆しています。また、キリストはこのことを「めとったりとついだり」（marriging and giving (out) in marriage）（マタ二四・二八）という描写的表現を用いて、ノアの時代には、無頓着な態度が普通であったことを示唆しています。

少なくとも議論のために、ベネ・エローヒームがまさに天使であり、男性としての生殖器系統を実際に備えた完全な人の形態を持っていたと仮定すると、彼らと人間の女性との性的関係によってできた子どもの性質について、重大な疑問が生じなければならないのです。「巨人」の正体については後で検討するとして、ここで重大な問題は、これらの性的結合をどう解釈すべきかに関する態度です。堕落した天使には救いの可能性がありません。しかし、堕落した男と女には、少なくとも救いの可能性があるのです。では、半分は天使

で半分は人間という「人」の場合にはどうなのでしょうか。

これは非常に奇妙な事態で、たとえ、それが本当に生理学的に実現可能なことであったとしても、神がそれを実際に行うことをお許しになったかどうかは実に疑わしいことです。しかし、それにもかかわらず、すでに示したように世の一節を、単にセツ系の息子たちがカイン系の娘たちと結婚し始めただけだという意味にとると、実際の聖書の記述を損なうことになります。もし、このことがここで示していることなら、なぜ著者は、ただそう言うだけで、ここから生ずる全ての混乱を避けようとしなかったのでしょうか。なぜ巨人なのでしょうか。なぜ、地は暴虐で満ちていたのでしょうか。

セツ系の息子たちは、全てが神を敬う人々であったわけではありません。それでは、なぜ、彼らが神の子らと呼ばれなければならないのでしょうか。思い起こして下さい。**彼らはすべてが洪水で滅ぼされたのです！**

さらにアダムはカインやセツの他に、多くの息子たちを生みました。彼らは、霊的な面でも「神の子ら」だったのでしょうか。このようなことは歴史上ノアの時代にはありそうもないことです。さらに、なぜ、神を敬う男と敬わない女だけを強調するのでしょうか。「神の娘ら」とは何でしょうか。彼女たちは「人の子ら」と結婚したのでしょうか。

この自然主義的な解釈は、あまりにもこじつけが多く、ぎこちないので、このようなことを実際に著者が言いたかったことだと想定することは、霊感の教義を損なうような気がします。確かに、彼はノアの時代に、このような異常で邪悪な恐ろしい侵入が、突如として地上に巻き起こり広がったとの考えを読者に伝えようとしました。このようなことは、悪魔のような超自然的原因によってでなければ説明できないことです。

合理的な注釈では、もちろん、この本文をそのままの意味で受け入れ、人間の女性と一緒に生活している

天使について語っているのだとの立場に賛成します。しかし、彼らは合理主義者なので、このようなことは有り得ないから、創世記の著者は、さまざまな宗教的言い伝えの半身半人の神話や伝説を述べているに過ぎないと主張するのです。

他方、聖書の記録が真実で、これらの色々な巨人や半神半人の伝説は、族長たちが伝達した真の系列から離れた文化圏で何世紀もかかって物語を口伝えしているうちに出てきた事実のわい曲を示していると取れる可能性はないでしょうか。

七十人訳聖書では「神の子ら」と言う一節が「神の御使い」と訳されていることは大切です。これは、使徒時代に用いられた主な聖書が七十人訳聖書だったからです。キリストや使徒たちはこの節をこのように読まれたはずです。旧約聖書外典のエノク書も当時すでにあったので、新約聖書の著者たちにも知られていたでしょう（ユダ一四節）。そうして、天使としての解釈が実に重んじられていたことでしょう。これらの事実から出てくるものとして、この意味での解釈が強く新約聖書の三つの箇所（ユダ六節、Ⅱペテ二・四～六、Ⅰペテ三・一九、二〇）でも以下に記す通り要求されていたでしょう。

しかし、明らかに、天使と人間の結合という考えには、重大な困難があります。このようなことが可能がどうか疑わしいばかりではなく、さらに、神学的な矛盾、このような結合で生じる子孫の奇妙な性質などを考えるとなおさらです。このジレンマを解決する方法があるのでしょうか。

神の子らは、本当の人間の父と母から生まれた本当の人間の子ですが、みな悪霊にとりつかれ支配されていた、と認めることが一つの解決策です。すなわち、これらの堕落した天使のような「神の子ら」は、何か悪霊つきと同じような方法で男性の身体に住みつき、それから、また同様に女性の身体にも取り付いてその

目的を達成したのです。それで、身体に悪霊が取りついた男性たちは、軽率で反逆的な当時の女性たちにとって非常に魅力的であったため、だれでも選ぶ女性を支配し用いることができたのでしょう。その当時までに発達したさまざまな化粧品と装飾品によって人目を引く女性の美しさは、男性を常に性的魅力に取りつかれた状態にするのに十分であり、人口をものすごい勢いで増加させたのです。こうして、「神の子ら」は、食い物にするために男性の身体を獲得しただけでなく、このようにして、彼らがめとった女性と生まれたすべての子どもを支配しました。

それゆえ、これらの悪魔のような特別な天使たちは、神に反逆してサタンに従うという初めの罪に、自分の領域（文字通りには「堕天使としての公国君主の地位」）を守らず、今や「自分のおるべき所」を捨てることにより、後の「ソドムの町々と同じように」不自然な肉欲を追い求め（ユダ六、七節）るという罪を増し加えました。したがって、神は彼らが他の悪魔のように地を行き巡ることをもはやお許しにならず、彼らを特別な「地獄（肉体から分離した魂の通常の住みかではない、文字通りにはタルタロス）」へ投げ落とされ、裁きの時まで暗闇の穴に閉じ込めてしまわれました（Ⅱペテ二・四）。

人間の身体に悪霊が「とりつき」、「住みつく」というこの恐ろしい現象は、その後しばしば繰り返されています。しかし、サタンがノアの時代にしたほどの全地球的規模にはまだ決して達していないようです。悪霊につかれたような例は、新約聖書に数多く記されており、また、宣教師たちは、これが今日なお異教の地で普通に見られると証言しています。福音の影響で今までこのような現象が最小限に抑えられてきた現代の「キリスト教圏」においてさえ、このような形でのサタンの活動は、明らかに急激に増加しています。降霊術、魔法や他の形のオカルトに対する信仰と実践（悪魔崇拝そのものでさえも）が、特に、多くの若い人々の心

と身体にとりついているのです。

「天の万軍」にすさまじい関心が近年盛り上がっているのはこれと密接に関係した現象なのです。すなわち占星術でいわゆる「神の戦車」さまざまな未確認飛行物体（UFO）とその奇妙な乗員などです。科学者は人を欺くこれらに関する仮定事項とその解釈を実にうまく指摘しています。それでも科学的に説明できないが実証されているようなそれでいて実に厄介な奇妙なデータを備えた手に負えない現象が残っているのです。

恐れてはならないことは、「主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊」（エペ六・一二）は本当に存在し、サタンは「空中の権威を持つ支配者」（エペ二・二）であることです。堕落した天使も、堕落していない聖なる天使と同様、ある場合にはさまざまな種類の形態（「義のしもべ」としてさえ。Ⅱコリ一一・一五）をとり、人間の身体に住みついて支配します。さらに、イエスも、終わりの日には「恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現れます」（ルカ二一・一一）と警告しておられます。霊的に恐怖をもたらす説明できないオカルト現象が非常に増加して、ノアの時代にあったこのような特殊な状態が現代も繰り返されようとしているようです。この現象の目的は、キリストの再臨の前に、サタンが大勢の人間の魂と体を直接支配下に置こうとしているためと思われます。

六章三節　そこで、主は、「わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう。それは人が肉にすぎないからだ。それで人の齢は、百二十年にしよう」と仰せられた。

これもまた、難しい節で、さまざまに解釈されています。「わたしの霊は、永久には人のうちに止まらない

であろう」と神が言われた時、聖霊のことか、神が人体に吹き込まれた霊のことか、神がどちらの意味で言われたか疑問です。また、一般に人類のことを言われたのか、それとも特にアダム（「人」という単語はアダムで、神がこれらの言葉を語られた、おそらくエノクの時代には、アダム自身、まだ生きていたはずです）を指して言われたのかも疑問です。「百二十年」に対して、ある人は、ヒトの将来の寿命を指していると理解し、ある人は洪水までに残されている時間に過ぎないと解釈する人もいます。この他に単にアダムが死ぬ前に残されていた年代を指すとの解釈もあります。

この一節をありのままに読むと、この節はキリストがヨハネの福音書一六章八節で、「罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせる」と話された聖霊の働きに関係しているようです。洪水前の世界の道徳的、霊的な性質が低下するにつれて、特に、今述べた悪魔的支配に引き続いて、人々はあまりにひどく堕落したので、回心の余地もないほどでした。彼らは聖霊のあかしに完全に取り消しのできないほどに抵抗したので、聖霊が彼らのうちに「とどまる」ことは、もはやなんの役にも立たなくなりました。ヘブル語 doon（ドーン）ということばは、ここだけに用いられているので、意味はいくらか不鮮明ですが、恐らく、「さばき」の概念を含んでいたことでしょう。

主は、人間は「肉」でもあると強調されました。この「も（also）」は、おそらく、人間が霊的性質と共に肉体を持っている事実を述べたのでしょう。人の霊に対する神の霊のあかしは拒否されたので、もはや、人間の肉体を維持し、人を増し加え続けるために貢献する目的はなくなりました。また、人間は、動物に過ぎないものになったことを暗示しているのかも知れません。すなわち、人間はまるで動物と同じくもはや神のみこころにはかかわりなく、自分の肉体の要求のみに関心を示し、専ら「肉」に支配されていました。神は

ノアに「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている」（六・一三）と、そしてまた後に、人間も動物も含めて「すべての肉なるものは……死に絶えた」（七・二一）とも仰せられました。

人間の肉的欲望と神の霊との争いは、後にパウロによって新約聖書に、クリスチャンの霊的性質（聖霊によって光をともされ力づけられた性質）と肉欲（産まれながらの肉につける性質ロマ八・五、ガラ五・一六、一七）との間の争いの一つの型として取り上げられています。

洪水前になされた人間に対するこの聖霊にのあかしは、神の預言者の一人を通してなされた神のことばの宣教によって達成されたに違いありません。エノクとノアの二人が、当時の人々に力強いあかしをしたことが知られていますが、メトシャラとレメクも同じ事をした可能性があります。

この特別な預言は、おそらくメトシャラを通して、ちょうど洪水の百二十年前に与えられたようです。エノクはすでに取り去られていたので、当時、メトシェラが生きていた族長のうちで最年長でした。セム、ハム、ヤペテはまだ生まれていませんでした。そして、おそらく、ノアに対する神の特別な命令（五・三二、六・六一〇、六・一三～二一）は、まだ与えられていなかった事でしょう。

神はノアの時代にゆきわたっていたこのような恐るべき状態のもとでさえ、ずっと長い間、忍耐しておられました（Ⅰペテ三・二〇）。すべての人間が、神を拒んだのに、神はなお、少なくとも何人かが「悔い改めに進む」（Ⅱペテ三・九）という実にわずかな可能性の下に、人間に百二十年もの生命を許容して下さいました。乳児だった人々にとってさえ、成人になり神を受け入れるか拒否するかを決める機会を豊かに持てる十二分な時間でした。セム、ハム、ヤペテとその妻たちのように後で生まれた人々は、救出されるために神の恵みによる特別な明示が必要だった事でしょう（六・八、七・一参照）。

六章四節　神の子らが、人の娘たちのところに入り、彼らに子どもができたころ、またその後にも、ネフィリムが地上にいた。これらは、昔の勇士であり、名のある者たちであった。

かつて、地上に生息していた生物の化石を研究する古生物学が明らかにした最も驚くべき事実の一つは、現在生きているほとんどすべての生物に、昔はもっと巨大な形態のものがあったということです。マンモスやホラアナグマ、巨大なゴキブリやトンボ、恐竜のような巨大な爬虫類のことを考えてください。それらと共に、しばしば、巨大な人間の足跡が発見され、実際に、「そのころ、巨人（ネフェリム）」が地上にいたことを示唆しています。聖書にあるばかりでなく、他の古代の多くの書が巨人の言い伝えを持っています。

このように古代の言い伝えと同時に、古生物学上の証拠もあり、これらのデータ、すなわち、歴史的に記述された実際の出来事と、その特質を創世記のここでそのまま反映したのかも知れないのです。この可能性を無視するのは思慮を欠いた不自然なことです。

悪魔に支配された当時の男女の結合で生まれた子供たちは、昔の勇士である「巨人」になったと言われています。この単語はヘブル語ではネフェリムで、動詞ナーファル（「堕落する」）の派生語です。注解者の中には、この語は「攻撃する者」、すなわち、「攻撃手」の意味であるとする人もいますが、より自然でより可能性の高い意味は「堕落した者」です。おそらく、にせの両親である堕落した天使の性質を反映しているのでしょう。その名前もまた、「巨人」を意味するようになり、後に、イスラエルの斥候がカナンで見た巨人を表わす時にも用いられました（民一三・三三）。創世記をギリシア語に訳した人々は、この語をこのように理

解していたので、七十人訳聖書では、ギガンテスと訳されています。

なぜ悪魔に支配された両親から生まれた子供たちが巨人になったかについて、筋の通った仮説を立てることはできますが、聖書にはこれらについての啓示がないので、あくまでも仮説にすぎません。近代遺伝学は、人間の肉体上の形質に変化を引き起こす基本的な要因が二つあることを示しています。すなわち、突然変異と組み換えです。遺伝子系の中には、異なった性質を表す膨大な数の因子があります。特定のある集団では、ある因子は優性なのに、ある因子は、潜在性であったり劣性であったりします。これらをさまざまな方法で「組み換え」て、肉体の性質に、ほとんど無限の変異をもたらすことができます。しかし、組み換えは、すでに遺伝子に潜在的に存在している因子についてだけ作用します。一方、突然変異は、全く存在していない新しい性質を導入することができます。それは、外的影響に対する応答であり、そのエネルギーが、遺伝子系に働いて、ランダムな変化をもたらすのです。

身長が大きくなる要因は、創造されたヒトの遺伝子プールの中に、初めから入っていたようです。巨人が特定の住民の中で度々優性形質として出現するようになったのは、少ない住民の中での近親交配の機会があったためか、あるいは、遺伝的な方法を熟知していた交配者が巨人を造りだそうと意図して遺伝子を操作したためでしょう。今日の遺伝学者たちは、この種の出来事を実際の根拠に基づいて行なう「遺伝子工学」の突破口に立っているようです。

当然変異でも「巨大化」を引き起こし得ると考えられています。遺伝学者たちは、クローン化という不思議な方法を用いて、ヒトの受精卵に体細胞を植え込み、アインシュタイン（または「のっぽのウィルト・チュンバリン」【ウィルト・チュンバリン＝アメリカのプロバスケットボールの選手。背が高いことで有名】やま

た望むならだれでも）の複製を作り出すことができると考えていますが、この方法もまた、巨大化を起こす手段となるかもしれません。

問題点はこうです。現代の遺伝学者たちがきわめてまじめに、このようなことを実行できる可能性が切迫しているとして論議するならば、これらの秘密の知識が天使（悪魔）の軍勢にとって役に立たなかったわけはありません。これらの堕落した天使（神の子ら）は、洪水前の両親の心と身体を本質的に完全に支配して、このような遺伝子操作によって、子孫が一種の怪物になるようにすることができました。そして、この怪物も同様に彼らの所有となり、支配を受けたことでしょう。

一般に、カインの子孫たちの中には、物質主義と不信仰との悪魔的な組み合せの文明がゆきわたり、また、悪魔であるヘビのすえが直接人類の大部分に入り込んだり、不法な結婚で生じた怪物のような大勢の子孫の影響で、寛大で忍耐強い神でさえ、どうにも耐えられない状態に、世界にあるすべてのものが引き込まれました。

悪魔に取りつかれた人々とその子孫は、洪水前の世界の神を認めない他のすべての住民と共に、ノアの大洪水で間もなく滅ぼされようとしていました。それらの水は、今は海の水であり、「海はその中にいる死者を出し」（黙二〇・一三）と言われている最後のさばきに関連して述べられている水であるかも知れません。彼らの身体に住みついた悪霊どもは、暗闇の穴の中に閉じ込められています（ペテ二・四）。そして、それらの霊はおそらく、「昔、ノアの時代に、……神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった捕らわれの霊」（Ⅰペテ三・一九、二〇）たちのことで、キリストが死後、霊において彼らのところに行き、彼らの邪悪な意図に対する完全な勝利を宣言したのです。

巨人は「またその後にも」、すなわち、カナン人の時代にもいました。彼らはネフィリム人として知られていました（民一三・三三）。人間的に言えば、彼らはアナクの子孫です。それで、彼らもまた、アナク人として知られていました。もちろんモーセはこれらの人々を知っていました。おそらく、モーセが編集の際に「またその後にも」という句を六章四節の、ノアのはじめの原稿に挿入したのでしょう。モーセは彼らが「昔の勇士であり、名のある者たち」であったという情報も入れたのでしょう。彼らの強さと暴力を用いた手柄話は、洪水後のすべての民族の歌や物語に残っているので、彼らは有名だったのです。後の時代の反抗的な人々は、彼らを偉大なヒーローとして尊敬しました。しかし、神の目から見れば、彼らは、乱暴で邪悪な神を敬わない人間に過ぎなかったのです。

暴虐で満ちた地

洪水前の時代の世界の状態が、来るべき大激変をあらかじめ示していたのと同様に、最近の世界の状態は、「この時代」と同様、さらに大きな激変をあらかじめ示しています。いくつかの特徴をまとめて見ましょう。

1　肉欲の先行（ルカ一七・二七）
2　工業技術の急激な進歩（創四・二二）
3　甚だしい物質主義的態度と興味（ルカ一七・二八）

4　斉一論的考え（ヘブ一一・七）
5　快楽と安逸を過度に熱望すること（創四・二一）
6　信仰や行為の上で神を無視すること（Ⅱペテ二・五、ユダ一五）
7　結婚関係の聖さを踏みにじること（マタ二四・三八）
8　神の霊感によるみことばを拒否すること（Ⅰペテ三・一九）
9　人口の爆発的増加（創六・一、一一）
10　暴虐で満ちていること（創六・一一、一三）
11　社会全体の腐敗（創六・一二）
12　不法な性行為にふけること（創四・一九、六・二）
13　冒涜的なことばと思想が広まること（ユダ一五）
14　組織的なサタンの活動（創六・一～四）
15　極端な堕落した考えや活動の広がり（創六・五、一二）

これらの状態はノアの時代に広まっていました。そして、それらはすべて、今日、再び急速に広まりつつあるのです。それゆえ、今の時代が主イエス・キリストの再臨の直前の時代であると信じる十分な根拠があるのです。

六章五～六節　主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのを

ご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。

大洪水前のサタンとその手下どもの陰謀は、カインやアダムの他の子どもの子孫の中ばかりではなく、セツの子孫にさえ急速にゆきわたり、驚くほどの成功を収めました。神は人を神のかたちにお造りになり、愛の心で神の愛に応答するように望まれましたが、今や、「心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾いた」のです。神は、人間に「生めよ。ふえよ。地を満たせ」（創一・一八）と仰せられましたが、今や、「地は、暴虐で満ちていた」（創六・一一）のです。無秩序と恐怖の状態が支配したに違いありません。聖書の記者（恐らくノア自身）が、人間的な視点に立ったことば遣いで語って、「それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」と言ったのは当然です。

一方、次のこともまた真実です。すなわち、神は、「人間ではないので、悔いることがない」（Ⅰサム一五・二九）ということです。それにもかかわらず、神はときどき人間に対して悔いている（すなわち「みこころを変えられる」）ように見えます。しかし、それは、人間の方で神に対する態度を変えてしまったからです。前述の宣言が記録されたと同じ状態で、神は、「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ」（Ⅰサム一五・一一）と言われました。事実、正確に言えば、神は悔いることはないので、人間が「心を変えた」時に、神が悔いたように見えたのに違いありません。人間に対する神の態度は、神に対する人間の態度によって決まるのです。

神は、人間のために完全な世界を造られ、また、造られた人には驚くほど忍耐強い方です。しかし、神ご自身の聖さについて公平に見て、とどまるところを知らない人間の邪悪な行為をやめさせなければならない

時がついにやってきたのです。少しでも遅れると、人類のために人を用いて達成しようとしておられた神の計画が、完全に妨げられてしまったに違いありません。外面に現われた人の邪悪な行為、すなわち「人の悪が地上に増大し」たのです。人間の内面に思い描くことが完全に悪く、常に悪い行為となったからです。

邪悪な天使が、この状態を一層悪くしたのですが、もともと責任は人間自身にありました。悪魔は、神に対する反逆心をすでに抱いている人や、このような状態に心を開くような良くない思いに取り付かれている人だけを操ることができます。その天使たちは、すべての女を妻としたのではなく、「好きな者を選んで」妻としたのです。それにもかかわらず、洪水前のすべての人々は、直る見込みもないほど邪悪になってしまいました。このような思いに取り付かれた人々の異常性に対して黙認以外のなにものもなかったのです。

人間の心が、悪巧みでいっぱいだったので、神は「心を痛められた」（訳注・欧米では、一般に心は心臓にあると考えられていて、この箇所の「心を痛められた」という表現は、心が宿っている心臓を暗示しています。しかし、すぐあとの文章で、心が心臓にあるということを意味してはいないことが説明されているのです）のです。これは、人間の理性が、実際には、器官としての心臓を中心として作用するということではなく、また、神が肉体的心臓を持っているということでもないのです。この表現は、感情や決断において、人の最も深いところを示すために、聖書のいたるところで用いられている表現です。

概して、生まれつきの人は「罪の下にある」（ロマ三・九）というのは真実ですが、洪水前の人々についての六章五節（及び一一～一三節）の記述をそのままあちこちのすべての人に当てはめるのは、適切ではありません。自分を正しいとするすべての未信者の場合、外から見て邪悪さは確かに「大きく」はありませんが、多くの邪悪な人は「いつも悪いことだけ」を想像しています。一般に、未信者の場合には、確かに段階があり、

それゆえ罰にも段階があります。しかし、五節に述べられているようなひどい訴えは、確かに、ある種の奇妙な、そして異常な動機で行動していたことを反映しているのです。それゆえ、激変（大洪水）による治療が必要でした。それはまたとない大洪水の水で全世界を水びたしにするという洗浄方法で、それ以下ではだめだったのです。悪魔的邪悪さが、世界中の男、女、子供に対する主権を確立し、神の贖いの約束を台無しにする前に、神は大洪水によるさばきをもって干渉しなければなりませんでした。

六章七～八節　「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったことを悔いる。」と言われた。しかし、ノアは主の前に恵みを得た。（協会訳）

「ノアの歴史」と呼ばれているこの部分は、たぶんノア自身によって書かれたもので、この段落で終わっています。世界中に広がっている邪悪な行為に対する治療法は、全世界に及ぶ洪水でなければならなかったことでしょう。そして同時に、すべての陸生生物も滅ぼされなければならなかったのです。こうして、けものや鳥、はうもの（魚を除いて）は、ヒトと一緒に地の面から滅ぼされることになりました。主は人類の支配領域の一部としてそれらの生物をお造りになられたので、人類とともに、その支配下のものを滅ぼすのは、主の主権なのです。

しかし、一つだけ例外があることになっていました。「ノアは主の前に恵みを得た」のです。当時の世界全体で、最も神を敬う重要な人物が、記録を締めくくるに当たって、このようにあかしされているのは大切です。なぜなら、彼は、恵みによって救われた罪人に過ぎなかったからです。

「恵み」とはなんとすばらしい言葉でしょう。聖書の中で、ここに初めて出てきます（訳注・協会役では「主の前に恵みを得た」となっている）。この上ないあわれみと恵みの選択によって、神は、ノアの心が神の意志に忠実に従って応答するように用意しておられたのです。

ここで、聖書の記事の順序が終始一貫していることに注目してください。第一にノアは恵みを得た。ついでノアは「正しい人」（すなわち、「義認された」または「義と宣告された」人）であった。こうして、「その時代にあっても全き」（または、神の記録である聖書に書かれている限り「完全な」）人であったのです。それゆえ、彼は、「神とともに歩む」ことができたのです。神による救いは、いつの時代においても、まさにこの順序です。信仰を通して得られるこの上ない恵みによって、信者は神の御前に義と認められ、キリストにあって完全であると宣言されたのです。この栄光に満ちた恵みの賜物に基づき、また、それを受けた結果としてのみ、人は神と共に「歩む」ことができ、信仰の純粋性を行ないによって示すことができるのです。例えば、ノアは「すべて神が命じられたとおりにし」た（六・二二、七・五、七・九、七・一六）と、後で四回も言われています。

ノアは「その時代にあっても」全き人であったと記録されています。記録されている範囲では、彼は、長寿であって、エノク以来何世代にもわたる同時代のすべての人々の中で、「神とともに歩んだ」ただ一人の人でした。ノアは、「義の宣伝者」（Ⅱペテ二・五）でしたが、しかし、彼の宣教にはだれも応答しなかったようです。不道徳なことを行わせようとする圧力が、抵抗出来ないほどになっていたに違いありません。奔放で暴力に満ちた社会の誘惑は、「ノアの時代に、従わなかった」（Ⅰペテ三・二〇）一般大衆の絶えざる拒否と嘲りとともに、ノアにとっては想像も及ばないほど絶え難かったに違いありません。私たちが知り得る限りでは、

彼は、何百年も宣教しましたが、数人の家族を除いてだれも回心した人はありませんでした。

ノアは特に偉大な信仰の勇者でした。ヘブル人への手紙一一章に記されている信仰の勇者たちの記述の中で「信仰によって」という句で始められ、結ばれているのはノアだけです（ヘブ一一・七）。

六章九節の後半から始まる新しい段落は、「ノアの息子」（一〇・一）が書きました。「ノアの歴史」は、六章九節の前半で終わっています。ここで注目すべきことは、ノアは自分のあかしを終わるに当たって「主の前に恵みを得た」とだけ述べていることです。一方、ノアの息子たちは、父についてのあかしから記述を始め、「ノアは正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった」と述べています。ノアは人間なので、確かに罪人でした。しかし、彼は神の恵みにより、神の約束を信じ神のみことばに聞き従い、また、神のみこころに従ったのです。サタンは何とかして世界全体を破壊しようとしていましたが、中でも最も滅ぼしたかった一人の人ノアは、神の恵みという絶対に打ち破れない防御壁の中にいたのです。

ノアの箱船

現代の大部分の知識人にとって、ノアは単なる伝説上の人物であり、ノアの箱船とそこに入った動物は、子供の絵本のための作り話に過ぎません。それゆえに彼らは、すべての説明がまじめで重要な歴史であると考えるのは、あまりに単純で、注目するには、及ばない考えだと思っているようです。

しかし、あとの聖書記者はそのようには感じ取っていませんでした。イザヤは、確かに、ノアを真剣にとらえて、次のように記しています。「このことは、わたしにとっては、ノアの日のようだ。わたしは、ノアの洪水をもう地上に送らないと誓ったが、そのように、あなたを怒らず、あなたを責めないとわたしは誓う」（イザ五四・九）。エゼキエルは、ノアについて二回、歴史上最も正しい三人の人のうちの一人として述べています（エゼ一四・一四、二〇）。歴代誌の記者もルカも、ノアを、キリストに至る正式な系図に入れています（Ⅰ歴一・四、ルカ三・三六）。

新約聖書の中で、使徒ペテロはノアについて二回、いずれも歴史上の重要な人物とみなしてはっきり述べています（Ⅰペテ三・二〇、Ⅱペテ二・五）。最も重要なことは、主イエス・キリストが、ノアと箱船の話を、実際の出来事として受け入れていたことです（マタ二四・三七～三九、ルカ一七・二六）。すでに指摘したように、ノアは、ヘブル人への手紙一一章七節にある通り、歴史上のすべての信仰者の中でも最高の人物の一人として挙げられています。また、箱船そのものも、これらの新約聖書の引照の大部分に述べられています。

六章九～一〇節　これはノアの歴史である。ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。ノアは三人の息子、セム、ハム、ヤペテを生んだ。

「ノアの息子たち」が、彼ら自身が生きた時代の記録を始めるに当たって、まず、自分たちの記録は彼らの父がつけていた以前の記録に結び付けられるべきだということを示唆しています。私たちが以前に説明したように、彼らは父の名前と敬虔な性格をあかしすることから始めました。

それから、彼らは、ノアの三人の息子、すなわち、少なくともノアの洪水を生き延びた息子としてセム、ハム、ヤペテの名で自己紹介をしています。彼らの名前の意味については、多くの議論があります。そして、それらは多少不確かであることを認めなければなりません。ノアの三人の息子が三つの民族の祖先であったと考えている人々は、それぞれの名は、ハムは黒、セムは浅黒、ヤペテは白を意味すると解釈しています。しかしながら、セムは、「名前」または「名声」を表わすのによく用いられているヘブル語です。そして、多くの学者はヤペテは「増大する」（創九・二七参照）を意味すると考えています。ヤペテは白を意味する可能性がありますが、「明るい皮膚」よりむしろ「美しい」を意味する可能性もあります。ハムに関する限り、「暖かい」または「暑い」を意味するヘブル語シャムに関係しているのかも知れません。

六章一一～一三節　地は、神の前に堕落し、地は、暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、実に、それは、堕落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。そこで、神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。」

物語は、次に、来るべき滅亡の理由について詳しく述べることで始めています。地は、堕落して、暴虐で満ち、すべての肉なるものが、地上でその道を乱していました。このように、人間の邪悪さと堕落とがはびこっていたと繰り返し強調されています。セム、ハム、ヤペテは、皆洪水前百年以内に生まれました。それで、彼らはその全生涯をこの堕落した社会のまっただ中で過ごしました。驚くべきことですが、彼ら自身はとも

かくもこの堕落から免れていたのです。万一、彼らの父母や祖父母が神を敬い、模範を示して教育しなかったならば、彼らも、間違いなく、洪水前の邪悪さに浸りきってしまっていたことでしょう。このことに役立ったと思われる一つの要因は、おそらく、彼らの父が、長年にわたり、箱船作りや洪水の準備で彼らを忙しく働かせていたことでしょう。

神は、人間に、地を満たすように命令されました。人間は確かに地を満たしましたが、同時に、暴虐を持って地を満たしたのです。神は、人間に歩むべき道を教えられましたが、今や、すべての肉なるものがその道を乱してしまったのです。「堕落」（ヘブル語 shachath シャハス）という言葉は、非常に強い意味を持つ用語で、しばしば「破滅」と訳されています。すなわち、堕落することは破滅することなのです。神の道に従う代わりに、すべての人間が羊のようにさまよい、おのおの自分勝手な道に向かって行った（イザ五三・六）のです。こうして、ついに、彼らは自らを破滅させてしまいました。

六章一二節「神が地をご覧になると、実に、それは、堕落していた」は、創世記一章から一一章までのちょうど中間に当たります。このことに注目すると、実に、この部分は興味深いのです。重要なのは、地上の人々が神を忘れ去っていったにもかかわらず、神はなおも地をご覧になっていたことです。「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています」（ヘブ四・一三）。

「すべての肉なるもの」という用語は、人間と共にしばしば動物をも指します（創七・二一参照）。何人かの著者は、この節は、動物もまた堕落したことを暗示する節だと示唆しています。すなわち、動物間での不法な生殖のために、化石記録に観られるような奇異な怪物（すなわち恐竜）が生じたかも知れないと示唆して

いるのです。しかし、ここで述べられているのは、明らかに道徳的堕落の一つであって、聖書には、動物が道徳的判断ができるという示唆は何もないので、「すべての肉なるものが、その道を乱した」という特別な表現は、人間以外の他の被造物に適応できません。このような事を示す示唆は何もないのです。

動物は、道徳的に人間と同じように罪深いものとはされませんが、人間の支配下に置かれているものとして、人間に対するさばきをともに受けるはずでした。これは七節に書かれています。

さて、今度は神が直接ノアに語って、さらに地球そのものもまた破壊されることを啓示されました。神がノアに語られた方法は明らかではありません。すなわち、幻によったのか、夢によったのか、あるいは直接現れたのかはっきりわかりません。

神はノアに、人を地とともに滅ぼすと仰せられました。洪水が局地的なものであったとか、穏やかな洪水であったとかと、主張する人々は、この節を、神が地上から人を滅ぼすと読み取るように強要しています。しかしながら、ここに用いられているのはヘブル語の前置詞「エス」ethで、これは「……とともに」の意味であって「……から」の意味ではありません。好むと好まざるとにかかわらず、聖書はその洪水が、世界を滅ぼす大激変であったと教えているのです。使徒ペテロが言っているように、「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました」（Ⅱペテ三・六）

六章一四～一六節　あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱船を造りなさい。箱船に部屋を作り、内と外とを木のやにで塗りなさい。それを次のようにして造りなさい。箱船の長さは三百キュビト。その幅は五十キュビト。その高さは三十キュビト。箱船に天窓を作り、上部から一キュビト以内にそれを仕上げなさい。

また、箱船の戸口をその側面に設け、一階と二階と三階にそれを作りなさい。

神は、地球上に人間と地に住む動物を保存するために、箱船と言われる巨大な平底の建造物を造るようにノアに命令されました。そして、箱船の中にいる者は、来たるべき洪水による破壊から救われるものとなります。神の命令によれば、その箱船は、走る速度とか操縦性よりも、むしろ収容能力と浮かぶ時の安定性があるよう設計されており、その寸法は、長さ三百キュビト、幅五十キュビト、高さ三十キュビトと定められていました。

問題は一キュビトの長さはどれくらいかということです。バビロニア人の一キュビトは、王が定めたもので約五十・三センチ、エジプト人には長短二種のキュピトがあり、それぞれ約五十二・五センチと四十四・七センチです。ヘブル人たちは長い一キュビトが五十一・八センチ（エゼ四〇・五）と普通の一キュビトの約四十四・五センチがありました。古代に、通常用いられた別の一キュビトは約六十一センチでした。大部分の著者は、聖書の一キュビトは約四十・六センチだと考えています。

非常に保守的な立場を取って、一キュビトは知られている限りで最も短い四十四・五センチであったと仮定します。この場合、箱船の長さは一三四メートル、幅は二十二・二メートル、高さは十三・四メートルです。このような寸法の巨大な船は、水力学的に非常に安定しており、転覆させることはまず不可能だということを証明できます。海の大波の中でさえ、箱船は九十度近くまでのどの角度に傾いても、その後直ちに元の状態に戻ったはずです。さらに、箱船は、大波の進行方向に並行して並ぶ傾向があり、こういうわけで、縦揺れはほとんどいつも、最低限にしか受けなかったはずです。

箱船の寸法が、計算通りだとすると、箱船の総容積は約四万立法メートルで、それは、現在アメリカの鉄道で使用されている標準の家畜運搬用貨車五二二両分の容積に匹敵します。貨車一両で二十四頭の羊が運べることが知られているので、箱船全体では十二万五千頭以上の羊を運ぶことができたでしょう。

箱船の建造について、もう少し詳しい記述があります。箱船は、三階まで、それぞれの階は十キュビトになるように造られ、それぞれの「デッキ」には、そこに入る個々の動物が休息するのに適当な大きさのいろいろな「部屋」（文字どおりには巣）が造られることになっていました。箱船は「ゴフィルの木」で造られることになっていました。ゴフィルの木の正確な性質は今日ではわかりませんが、明らかに木目の細かい硬い樹木であったと思われます。そして、箱船の外側には木のやにを塗り、防水と腐食止めをすることになっていました。

木のやに（ヘブル語 kopher コフィル）ということばは、旧約聖書の他の所で用いられている言葉とは異なっていて、ヘブル語の kaphar カーファル（「覆う」）と同じ意味で、名詞系は単に「覆い」を意味します。しかし、コフェルは、レビ記一七章一一節の例のようにヘブル語ではふつう「贖い」を意味するためのことばでもあります。事実、聖書の中で「贖い」についてはここで初めて述べられているのです。この「木のやに」の本当の性質がどのようなものであれ、おそらく、瀝（れき）青様物質よりはむしろ、ある種の樹脂状物質だったと思われますが、箱船を完全に覆い、さばきの水を入り込まないようにするのに十分でした。ちょうど、子羊の血が魂の完全な贖いのために準備されたのと同じです。

箱船には「天窓」（ヘブル語 tsohar ツォハル）もありました。それは文字通りには、たぶん「明かりとり窓」を意味したでしょう。言葉遣いは難しいのですが、大部分のこの道の大家は、この「天窓」は採光と換気の

ために屋根近くに、箱船の周り全体に置かれた一キュビトの隙間から成っていたと理解しています。おそらく、雨を避けるひさしもあったことでしょう。

さらに、「天窓」という言葉は、箱船の屋根の上を取り巻いている低い壁のことを言っているのであろうと考えられます。そして、水の供給の方法として一種の雨水をためる水槽の役目を担っていたのかも知れません。創世記の記者は、箱船建造の際の完全な設計明細書を記録しようと意図したのではなく、後で読む人が、その意図した目的をきわめて適切に、確認出来れば十分だとしていたことは明らかです。

もちろん、その目的は「地上の生物を保存する」ためでした。局地的洪水の考えはふまじめで有害です。箱船は、局地的洪水に際してその地域の動物群だけを収納するためには、あまりにも大きく頑丈に造られていました。実際、局地的洪水では箱船など全く必要がなかったはずです。鳥や哺乳類だけでなく、ノアとその家族も非常にすばやく、能率的に別の地方に移住できたことでしょう。

最後に、箱船の横にはとびらが造られることになっていました。箱船にはただ一つのとびらしかなく、すべてのものは同じとびらから入り、また出なければなりません。ひとたび動物が箱船の中に次から次へと入って来始めると、箱船の奥へ奥へと行くしか行場がないのです。このような状況であったとはっきり記されてはいませんが、キリストの型としての教育的目的があったかも知れません。キリストがみ父の家に行くただ一つの道（ヨハ一四・六）なのです。キリストはキリストの羊であるクリスチャンの休み場へのただ一つの「門」（ヨハ一〇・七～九）で、羊であるクリスチャンは、安全と休息のためにこの門から入り、その後、仕えるために出て行かなくてはなりません。

「箱船」（ヘブル語 tabhah テバー）のために用いられたことばは、後に「契約の箱」に用いられたことば

ではなく、モーセが乳児の時に隠されたパピルス製の手かご（出二・二）に用いられたことばです。それゆえ、このことばは、水に浮かぶ箱を表すずっと昔のことばだったと思われます。ノアが箱船を造り始めた時、そのことは洪水前の当時の人々には滑稽なことに思われたに違いありません。彼らは、どんなたぐいの洪水も、雨さえも見たことがありませんでした（創二・五）。ノアの宣教と建設の働きは、疑いなく彼らに多くのあざけりの機会を与えたことでしょう。それにもかかわらず、ノアは「まだ見ていない事がらについて神から警告を受けたとき」（ヘブ一一・七）、神のことばを信じ、着実に「家族の救いのために箱船を造り」続けたのです。彼は、自分の生命のためでなく、彼の家族が、当時の「世の罪」の邪悪さや不信仰に巻き込まれてしまわないように、おそれかしこんで行動したのでした。

神の備えとノアの従順

ノアへの神の通達が与えられた時期は、明確には告げられていませんが、創世記六章三節で神は、さばきが来るまでには百二十年位しかないことを予告し、警告を発しています。したがってこのすぐ後か、その後のいつかであったことに間違いありません。箱船の製作は、おそらく、ノアの洪水に先立つ百年間を通して行われたことでしょう。

こういうわけで、洪水前の人々は、ノアの宣教（Ⅱペテ二・五）と香水に対する模範的備えの両面を通して、

十分な警告が与えられていました。しかし、当時の斉一説に立つ科学者たちは、大洪水のようなことは起こり得ないと保証し、そのため彼らは、洪水が来て彼らを滅ぼしつくすまで、まだかそんなことは起こるまいと思って「飲んだり食べたり」し続けていました。

六章十七節　わたしは今、いのちの息あるすべての肉なるものを、天の下から滅ぼすために、地上の大水、大洪水を起こそうとしている。地上のすべてのものは死に絶えなければならない。

神は、ここで初めてノアに、やがて来る破壊がどんな形をとるかを正確に告げています。この破壊の方法は、箱船に関する神の指図の中にすでに暗示されていたと言ってさしつかえありません。それは一つの巨大な洪水（mabbul mayim マッブール・マイム）となるのでした。ここで初めて用いられた「洪水」（mabbul マッブール）ということばは、ノアの洪水にだけ使用されており、他の洪水は、原典では他のさまざまなことばで表されています。これは、「破壊」を意味するアッシリア語に関連しています。「流水の洪水」という言葉遣いは、「水力学的大激変」と訳してもよかったはずです。マッブールということばは、創世記六から九章以外では、詩篇二九篇一〇節で用いられているだけですから、詩篇二九篇で詩的に描写されている大洪水の活動もまた、ノアの大洪水についての言及に違いありません。

同様に、創世記の洪水が新約聖書に言及されている時、通常のギリシア語の「洪水」ということばの代わりに、独特の使い方として、マタイの福音書二四章三九節、ルカの福音書一七章二七節、ペテロの手紙第二、二章五節、三章六節などで、ギリシア語のカタクリュスモスということばが用いられています。この洪水は、

その後に起こった他の局地的な洪水とは比べものにならない、歴史上全く類を見ないものとなるのでした。

洪水は、ヒトだけでなく、「いのちの息あるすべての肉なるものを、天の下から」滅ぼすのでした。この節は、ヒトと同様に動物もまた、いのちの「息」（ルアハ、すなわち「霊」）を持っていることを示しています。「天の下」ということばは、「地に住むすべてのもの」という宣言と同じで、滅亡は地上の動物だけに適応されるとして、限定の意味を持っています。ノアの大洪水は海生生物のすべての種類を滅ぼしはしなかったでしょう。しかし、洪水に伴って起こった海底隆起のために、多くの海生生物が死んだことは疑う余地はありません。もちろん、このような言い回しは、局地的な洪水とか穏やかな洪水という考えとは、全く相いれません。

六章一八節　しかし、わたしは、あなたと契約を結ぼう。あなたは、あなたの息子たち、あなたの妻、それにあなたの息子たちの妻といっしょに箱船に入りなさい。

聖書で「契約」（ヘブル語でberithベリーズ）を結ぶことに関して、初めて言及しているのがこの節です。神は、ノアの従順に応えて、ノアの子孫、及び、彼といっしょに箱船にはいる者と、引き続いて契約を結ぼうとノアに約束されました。この契約の詳細は、九章九節から十七節で、彼らすべてが箱船から出た時に、念入りに造られました。

しかし、初めにノアが箱船を造って備えることが不可欠でした。こうして、来るべき洪水からいのちを守ることができたのです。特に箱船にはいるのは八人、すなわち、ノアと妻、三人の息子たちとその妻たちだけだと神は言われました。神は、ノアの宣教で当時の人々はだれも回心せず、それで、大洪水の水によって、

すべての人々が滅ぼされることを、あらかじめ知っておられました。もちろん、洪水（mabbulマッブール）が来る前に神を信じて死んだ人々（例えば、レメク、メトシェラ）も何人かいました。

六章一九～二一節　またすべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二匹ずつ箱船に連れて入り、あなたといっしょに生き残るようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならない。また、各種類の鳥、各種類の動物、各種類の地をはうものすべてのうち、それぞれ二匹ずつが、生き残るために、あなたのところに来なければならない。あなたは、食べられるあらゆる食糧を取って、自分のところに集め、あなたとそれらの動物の食物としなさい。

これらの節には、動物を箱船で保持するための指示が盛り込まれています。それぞれの「種類」のオスとメスは、「生き残るように」箱船に連れて来られました。「それぞれ二匹づつ」という制限は、実に多くの種類を含む包括的なものでした。神は、創造したすべての種類に対して目的をもっておられ、それで、すべての種類を洪水から救おうとされたのでした。さらに、この一般的原則に加えて、明らかに、家畜や献げ物として使えそうなすべての「きよい」動物は、七匹づつ箱船に連れて来られました（協会訳、創七・二）。

もちろん、大部分の陸生生物は小さかったので、箱船に入れるという仕事は、決して不可能ではなかったのです。生物分類学の権威者たちは、今日の世界に住む哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類は、一万八千種よりも少ないと見積っています。進化論者の頭の中にしか存在しない想像上の移行型でなく、実際に化石記録から知り得る、既知の絶滅した陸生生物を認めると、この数値は二倍になるでしょう。箱船には、各種類が二

匹づつとして全部で約七万二千匹、「きよい」種類の動物をもう五匹づつ加えたとすれば、七万五千匹の動物が入ったことでしょう。

すでに検討したように、箱船は、十二万五千匹の羊を運ぶことができるはずなので、また、陸生生物の平均の大きさは、羊の大きさよりも確かに小さいので、動物のためには、箱船の容積の六〇パーセント以下しか使われていなかったことが明らかです。実際上、聖書で言っている「種類」は、現代生物学で随意に決めている「種」の分類よりかなり広義であったと思われるので、その数値はこれよりも小さかったでしょう。

箱船で運ばれた動物には、ゾウ、恐竜、キリン等のような大きな動物も何種類かいましたが、ハツカネズミ、コマドリ、トカゲ、カエル等のような小さな動物がたくさんいました。おそらく、大きな動物でさえも、小さな幼い個体の動物が代表として入っていたことでしょう。なぜなら、その動物たちは、箱船の中で一年間も生殖行為なしに過ごし、それから、地上に再び住むために出て行ったのですから。

こういうわけで、聖書に詳しく記された箱船の大きさは、運搬を要する動物にとって全く適切であったと思われます。もちろん、約百万種の昆虫（疑いもなく、それらのうちの多くは、箱船の外でも生き延びられたでしょう）のためだけでなく、動物のえさ置き場や、ノアとその家族の住居や、その他のすべての必要なことのために使用する余地も十分にありました。

動物が集まるのに何も重大な問題はありませんでした。おそらく、地上のどこでも同じような暖かさだったことを思い起こすでしょう。さらに、海、丘などの地質学的特徴もまた、地球上に少なからず分布していたのです。したがって、動物は今日のように緯度や経度の違いで生態学的に隔離されることはなく、世界中に多かれ少なかれ同じように分布していたのです。それで、各種類の動物の代表が箱船に移り住むために来

た時、はるかに遠くにいた動物は、来る必要がなかったのです。

主はちょうどよい時に動物たちが「あなたのところに来る」と、ノアに仰せられました。それで、ノアは動物たちを捕らえるために狩りに出たり、罠をかけに出たりしなくてもよかったのです。これは、恐らく、史上初の動物大移動だったことでしょう。なぜなら、どこも気候が良く食物も豊富にあったので、このような移動は、それ以前には、決して必要がなかったからです。

ところで、それぞれの動物種の中には、このような移動本能を発現するようにプログラムされた遺伝子が組み込まれていました。洪水前の集団の中では、これらの移動本能を持った個体は選択されて残るほど価値があるわけではなかったので、支配的ではありませんでした。しかし、ある個体は、まだ移動本能を受け継いでいました。時が来て、これらの個体は嵐がやって来るのを本能的に感じ取り、移動を始めました。そして、神は、何らかの方法で、これらの個体をせき立ててそれらを待っている箱船の方へと進ませました。

それゆえ、箱船に乗った動物たちは、みなこのような遺伝子を持っていた可能性があるのです。彼らの子孫は、このような遺伝子を受け継いで、洪水後の世界で、必要なものとしてこれら遺伝子によって与えられた力を用いました。今までのところ、動物、特に鳥類が持っている驚くべき移動（渡り）と方向を感じ取る能力について、科学者たちは自然主義に立っては説明できません。これらの本能によって、動物は洪水後の世界の特徴である緯度や季節の違いによる厳しい温度変化に適応することができるのです。これらの能力は、箱船に乗ったそれらの祖先から受け継いだものです。

激しい温度変化やその他の気象変化に対する防御として、多くの動物、あるいは、潜在的にはすべての動物が持っていたもう一つのすばらしい生理学的機構は、身体に起こるすべての変化を冬眠状態に保つ能力で

す。この能力によって、動物は非常に狭い場所で、食物摂取や排泄をほとんどしないか全くしないで、冬を過ごすことができるのです。「夏眠」の現象も、非常に暑い時にする同様の休眠状態です。

移動（渡り）の能力に適応できたように、冬眠の能力にもほとんど同じ議論が適用できます。両方とも、人間にはなく動物にあるすばらしい能力であり、生まれつきの能力です。この能力によって、動物は長い悪天候に対処できるのです。いままで、創造主を認めない自然主義的な考えに基づいて、どちらの能力についても、適切な解明に至った科学者はありません。おそらく、これらの能力は共に潜在的に遺伝する能力で、創造以来、動物群の中のある個体に受け継がれてきたもので、ノアの洪水の時、神によってみこころのうちに選ばれ活性化されたことでしょう。これらの動物が箱船に来た時、十分に食料を食べていたことでしょう。急に空が暗くなり、空気が冷たくなるのに呼応して、箱船の中のそれぞれの「巣」で一年間の「眠り」に就いたのです。ある動物は、一年間、蓄えられていた食糧の一部を食べることができましたが、おそらく、食糧の大部分は、洪水の後箱船を去るに当たって、動物すべてに十分に与えられたことでしょう。

六章二二節　ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った。

ノアは神のことばを堅く信じていただけではなく、そのことばに徹底的に従いました。神がノアに課した仕事は、途方もないもので、きわめて難しく、しりごみせざるを得ないようなものでしたが、それにもかかわらず、ノアは、決して疑ったりつぶやいたりしませんでした。彼は、ただ従ったのです！

六章のこの最後の節は、神が忍耐して待っておられた百年間の全体を簡潔にまとめたものです。その間に、

ノアは「箱船が造られていた間、従わなかった」者たちに「義を宣べ伝え」ていました（Ⅰペテ三・二〇、Ⅱペテ二・五、ルカ一七・二六、二七）。

この節の他に、もう三回、ノアが神の命令をすべて行なったと告げられています（創七・五、九、一六）。おそらく、肉体的にではなく、霊的に、ノアは当時、実に地上の巨人であり、それ以来、彼と並ぶ者はこの世に存在しなかったのかも知れません。

ノアは、神とともに歩み、信仰によって神のことばに従ったので、神はノアとすばらしい交わりを持たれました。神がノアに話しかけられたという記事は七か所（創六・一三、七・一、八・一五、九・一、八、一二、一七）記されており、そのたびに神がノアとノアの家族との交わりを持ち、彼らを祝福されました。

それとは対照的に、前述のようにノアの洪水を取り扱っている詩篇二九篇では、「主の声」は、主を拒んできた世界に、威厳とさばきとをもってとどろき渡ったと七回も記されています（三～五、七～九節）。疑いもなく、これらは、「七つの雷」とその「声」に対応しています。これらの声は、未来のさばきについての叫びですが、その時まで、詳しい内容は封じられています（黙一〇・三、四）。